

Contents



- ・書評文化のさらなる発展を — 第二回松山大学図書館書評賞について —
人文学部助教授 大内裕和 P2
- ・入賞作品の講評について
経済学部助教授 松井名津 P3・4
- ・書評『Joe』の講評について
法学部講師 甲斐朋香 P5
- ・『発見、私の図書館利用法』
経済学部3年 本郷 学 P6
経済学部4年 吉本幸子 P6
- ・私が薦めるこの一冊
経営学部助教授 安積みづの P7
経営学部助教授 南 学 P7
- ・統計データで見る松山大学図書館 P8



第二回松山大学図書館書評賞・表彰式

書評文化のさらなる発展を—第二回松山大学図書館書評賞について—

人文学部助教授 大内 裕和

新聞・テレビなどのマスコミで大きく取り上げられ、話題となった松山大学図書館書評賞が第二回目を迎えた。何といっても第一回と比較して応募総数が増加したことはとても喜ばしいことであった。このような賞が設置されても、最初は新鮮な注目を浴びたものの、だんだんと関心を呼ばなくなるケースも多い。今年に応募総数の増加はそのような心配を良い意味で裏切ってくれたといえる。

応募作品全体のレベルも第一回より高くなっているといえた。第一回における渡辺孝次審査委員の厳しい指摘もあって、表記ミスが激減したことが書評作品の質を向上させている。第三回の応募者も第一回、第二回の入選作品や講評を参考にすると良いだろう。字数が第一回の800字以内から今回1200字以内へと増加したことも作品の質に影響を与えたといえる。800字が1200字になると、作品における文章構成がより重要になり、見解の独自性を発揮する余地が増大したからである。この点において優れたものが、最優秀賞をはじめ受賞作品に選ばれることとなった。文章の正確さや適切な紹介という点だけでなく、論の立て方や展開、書評者の独自性が評価の対象となったのである。

審査にたずさわると書評の難しさと重要性を痛感する。レポートや卒業論文と違って、極めて短い文章に、対象とした本の紹介と書評者の見解を展開しなければならない。書評者は本を正確に読解すると同時に、それについての紹介と見解を短く凝縮した形で表現する必要がある。これは本を読解する点でも、文章を書く点においても厳しい作業である。しかしそのことは書評者にとって、とても良いトレーニングとなることは間違いない。書評の練習を積み重ねることによって、レポートや卒業論文の質は飛躍的に上昇するだろう。書評が諸外国で大学教育、学会活動などで重視されているのは、そのことの重要性が広く了解されているからである。学生にはぜひ積極果敢にこの書評賞に挑戦してもらいたいし、諸先生方にも学生に応募を薦めていただけるようこの場を借りてぜひお願いしたい。

筆者自身、書評や本の紹介をこれまで幾度となく行ってきたが、それが自分の読解力や文章力の向上につながってきたことを今になって痛感する。特に大学院生時代、アエラムック『教育学がわかる』（朝日新聞社）で教育学の50冊の紹介を依頼された時のことは忘れられない。わずか1ヶ月弱で教育学全体の分野の本を50冊選択し、それぞれに200字の紹介文をつけるという作業を依頼された。東京

の主要な書店を巡って本を100冊近くピックアップして、それを猛スピードで斜め読みすることで、50冊を選択した。そこから3週間位で50冊の本を読み、それぞれの論点を捉えて紹介を書く作業はとても苦勞の多いものであった。しかし偶然に依頼された仕事として強いられた作業であったが、これは私にとって、非常に実り多いものになった。幅広い分野のものを読むことで教育学全体に対する視野が広がったばかりでなく、本の内容を把握するポイントがつかめるようになった。抽象的な言い方になるが、この作業以降、本を読むときの見通しがとても良くなっていったように思う。『教育学がわかる』で本の紹介文を書く作業は、研究者としての私のその後の仕事にとって、とても良い経験となったのである。書評の仕事は現在でも続けている。昨年『週刊読書人』（代表的な書評専門紙、図書館にもあるので学生の皆さんも参考にしてほしい）で、教育学者である佐藤学さんの対談集『身体ダイアログ』（太郎次郎社）の書評を書くこととなった。佐藤さんと多彩な人々との対談集であったこともあり、論点を整理して批評する作業は困難であったが、これも自分にとって役立つものとなった。書評を書く作業を通して、佐藤さんの教育思想のポイントがより理解できるようになり、自分との共通点と差異を明確化することができたからである。書評を書くというときには、普段日常的に本を読むとき以上に、集中力を高めて本を読むことが要求される。このことがとても良い勉強となるのである。また「書く」という作業を通して、その本の理解をより明確にすることができる。「理解」したことを文章に「書く」という脈絡で考えられがちであるが、「書く」という作業によって「理解」が広がり、深まっていくことの重要性がもっと認識される必要があるだろう。

豊かな蔵書をもつ松山大学図書館において、開架図書の充実や事務職員の皆さんの努力もあり、学生による利用が近年急速に増加していることは、とても素晴らしいことである。松山大学図書館書評賞は、そうした学生における読書の広がりという時宜にかなった企画であったといえるだろう。書評は本を読むという作業をさらに深め、自己の思考を表現する訓練となる。大学教育の基本は、正確な知識に基づく論理的思考と表現なのであり、書評はそれを鍛える格好の作業なのである。松山大学での書評文化がさらに発展していくこと、それが大学における教育の充実につながっていくことを心から祈りたい。

入賞作品の講評について

経済学部助教授 松井 名津

●中矢君

中矢貴久：最優秀書評賞、富野由悠季著

『戦争と平和』（徳間書店）

語り口のうまさと高度な内容とで最優秀賞を獲得したのが中矢さんの書評です。語り口のうまさについては既にホームページの講評でも触れましたが、読ませる文章だというだけでなく内容的にも高度なものとなっています。

例えば第3パラグラフに「ヒロイックなマッチョの妄想」という言葉があります。この用語は結構難解だといえるでしょう。ところがガンダムというアニメ世界を前提にしているので、このアニメを知っている読者や、たとえこのアニメを知らなくても戦争アニメというジャンルに漠然としたイメージを持っている読者であれば、用語の正確な意味内容を知らなくても、大体のイメージをつかむことが出来るでしょう。書評の対象となっている世界（この場合はガンダムというアニメの世界）を背景としてうまく使うことで、難解な用語のイメージを伝えているわけです。

対象とする本によっては、書評の中でどうしても難解な言葉を使う必要がでてきます。専門的学問領域での書評であれば、そうした難解な用語を知っていることは当然視されるわけですが、松山大学図書館書評賞は「学生による、学生の、学生のための」書評を目指しているわけですから、自分自身もよく分かっていないような難解な言葉を散りばめるのは逆効果です。難解な言葉であっても、自分自身がその内容をよく把握していれば、中矢さんの作品に見られるように、正確に理解できなくてもそのイメージは伝わる使い方が出来ると思います。

●池田さん

池田愛美：優秀書評賞、ミハエル・エンデ著

『はてしない物語』を読んで（岩波書店）

さて中矢さんの作品に関して難解用語の話をしました。この池田さんの作品は中矢さんとは全く逆といえるでしょう。高校生にもなれば、池田さんの文章にでてくる用語で、意味不明の用語は一つもないと思います。そこがこの作品の「読みやすく、素直な」印象を支えています。しかし言葉が優しいことは内容がつまらなくて陳腐だということに必ずしもつながりません。

『はてしない物語』の中から「虚像の世界から現実世界への回帰」を読み出してくること。そしてそれだけを柱として書評を書くこと。この二つは生半可な勇気で出来るこ

とではありません。『はてしない物語』は有名なファンタジーだけに、今までいろいろな人が書評していますし、映画になったことで映画批評として取り上げられることも多かった作品です。おそらく池田さん自身もこうした批評に出会ったことがあるでしょうし、この物語に対する多様な読みの可能性も知っているのだらうと思います（池田さん自身が「原作には映画では表せない良さ、面白さがあります」という文章を書いていますから）。となるとどうしても「あれも書いた方がいい、これもはずせない」になってしまいます。そうした（池田さんにとっての）枝葉を切り取って、できあがったのがこの作品だといえるでしょう。

こうした思い切った作業の結果できあがったからこそ、言葉は簡単であっても内容の深い「読み応えのある」作品に仕上がったわけです。言葉がわかりやすいもの、日常語に近いものだからといって、内容が浅いことにはなりません。自分の懐に書評対象作品を抱え込み我がものとすることで、深みのある書評が生まれることになると思います。

●竹口さん

竹口奈美：優秀書評賞、ダグラス・ラミス著

『考え、売ります。』（平凡社）

竹口さんも池田さんと同様にファンタジーに分類される本を書評の対象としています。二人ともファンタジーの世界に現実へのメッセージを読みとろうとする点でも似ているといえるでしょう。竹口さんと池田さんの作品を読むと、二人がそれぞれの本をどういう風に読み進み、何を思ったのか手に取るようにわかるような気がします。同じ本を一緒に読んでいったような気分になる。これがよい書評の持つ力でしょう。けれど二人の作品には決定的といってもよい違いがあります。

竹口さんの作品を読んだ後、頭に残るのは「考え売り」という特異な人物よりも、この本が現実世界に向けて投げかけているメッセージのほうでしょう。これは竹口さんの作品の強みでもあり弱みでもあるとわたしは思います。何より竹口さんの思いがストレートに表現されている。この本を読みながら竹口さんが改めて気がついた疑問や問題意識が素直に伝わってきます。

ただ、私はこれが逆に弱みにつながらなければよいかと危惧しています。優れたファンタジーになればなるほど、その独自の世界というのがあると思います。それは安易な現実社会への適用を拒絶する場合があります。またファン

タジー世界に現実を読み込むという作業は、非常に「かっこいい」ですが、安直な知ったかぶりに陥りやすい作業でもあります。こうした落とし穴に陥らないように、やはりファンタジー世界内部へのまなざしもほしいなと思います。

●川嶋君

川嶋周平：佳作、小谷野敦著『もてない男』（筑摩書房）

今回3人の選者の内、2名が女性でした。だからというのではないでしょうが「よく書けている」という評と同時に「もう一歩書き込んでほしい」という評が拮抗しました。非常にまとまりの良い書評作品です。文章も破綻が少なく、本の内容を簡潔にまた的確にまとめきっています。

でも何かが物足りない。「この本は…だからお勧め」とか「この本、…がすごい」といった書評を書く動機があったと思うのです。それがないと書評が単なる内容紹介にとどまってしまいます。川嶋さんの書評では惜しいことに、この要ともいえる動機の部分がはっきりしません。男である川嶋さんは、なぜ女性にこの本を薦めたいのでしょうか？ 男たちの苦悩や葛藤を理解してもらって、もてない男を救ってほしいのかな？ それとも恋愛至上主義社会では女性も男性と同様に苦悩していると感じているからなのかな？

感想文ではない書評でこうした点も書き込むのは（まして制限字数内で）非常に難しいことだとは思いますが、最優秀賞をねらえる文章力を持っているだけに、チャレンジしてほしいと思います。

●大野さん

大野絵理：佳作、森田洋司、清永賢二著

『いじめ—教室の病—』（金子書房）

高度で難解な本の内容を的確に要約し、独自の切り口で論評している点が高く評価された作品です。実際この本の内容をここまでまとめきるのだけでも大変なのに、難解な用語を自分自身のものとしていることが随所に感じられます。

惜しくも優秀賞や最優秀賞を逃したのは、もしかすると大野さんのこの優れた能力のせいかもしれません。的確に内容を把握できるだけに、一冊の本をまんべんなく紹介しようとしてしまい、焦点がぼやけてしまっているのが非常に残念です。もし、これほどの能力がなかったら、自分の理解した範囲でこの本を紹介し、その結果焦点が明確で締まった書評になっていたかもしれません。社会学の初学者向けの本として勧めるのか、この本が提示しているいじめ問題への興味深い視点を紹介するのか等々、今回は焦点の絞り方を意識して挑戦してほしいと思います。それに成功すれば最優秀も夢ではないと思いますよ。

●成田君

成田純一：佳作、スティーブン・キング著

『スタンド・バイ・ミー』（新潮社）

成田さん自身は佳作という結果にすごく不満なのではないかと思います。受賞作品を読んだ人たちも、「何でこれが佳作なの」と思うだろうなと思います。実際選考会でももっと上位に位置づけても良いのではないかという意見も出ました。でも、やはり佳作だなと意見が一致したのです。理由は書き手が見えないという一点につきています。

実際成田さんの文章は非常にうまい。文庫本の帯に書かれている推薦文、新聞に掲載される広告書評と比べても遜色ないでしょう。だからこそ、そういった商業的な書評とは一線を画してほしいのです。「匿名の書き手から匿名の読者へ」ではなく「成田さんから松大の学生へ」宛てた書評であってほしいと思います。

●魚谷君

魚谷宜広：佳作、塩野七生著

『ローマ人の物語第X巻—全ての道はローマに通ず—』（新潮社）

魚谷さんは昨年に続いての受賞です。昨年の作品に比べてもずっと文章がこなれています。絶対評価だったら最優秀作品入りでしょうが、残念ながら相対評価です。第3パラグラフでの文章の破綻が響いてしまいました。一番力が入っている部分です。この本の魅力を伝えるために、この部分は是非とも説明しなくてはいけない、その部分です。それだけに、文章がややこしくなっていました。よくあることですよね。焦りや適切な言葉が見つからないもどかしさがその原因でしょう。

対策としては熟慮、熟慮の一手しかないと思いますが、魚谷さんの語彙力をもってすれば越えられない壁ではないと思います。

●太田さん

太田佳枝：佳作、ビバ！イタリアンクラブ編

『大好きなイタリアで暮らす—Ciao!Italia—』（双葉社）

太田さんも昨年に続いて書評賞にチャレンジしてくれました。昨年は難解な本に挑戦し、不十分な結果に終わってしまいました。今年は昨年とは違ってかわって平易な本を対象にして佳作を受賞しました。何よりも伸びやかな文章が読み手を打ちます。この点が昨年の作品との大きな相違といえるでしょう。堅苦しい壁に阻まれていた枝葉が十分なスペースを与えられたかのようです。太田さんの潜在能力が十二分に発揮された結果だといえるでしょう。

それだけにもう一歩より高度な段階に進んでほしいと思います。今回発揮した伸びやかな感性を大事に、再度難解な本を読み解いてほしい。あるいは平易な本の中から高度な内容を汲み上げてほしい。そんな期待を（一方的に）かけています。

書評『Joe』の講評について

法学部講師 甲斐 朋香

その男の子は今年二十歳になるところ。松山の大学に通い、ボクシングをやっています。(これはあくまでも勝手な推測ですが、多分) 普段は本なんてあまり読まないタイプ。

ところがある日、そんな彼が一冊の本に目を留めます。手に取ってページを繰るうちに、ぐいぐい引き込まれてしまっただけで読了。「すげえ！この感動を誰かに伝えたい！」彼は無骨な指でパソコンのキーボードを打ちはじめます。そのときの眼は、ボクシングの試合中、勝利の予感が頭をよぎった瞬間と、同じ色だったかもしれません。

・・・なんていう具合に、イメージが鮮やかに浮かんできそうな『Joe』の紹介文。惜しくも受賞は逃したものの、選考会においても大変話題になりました。

決して整った文章ではありません。ボクシングの防具を

つけたままで世の中を見ているかのような、ある種の視野の狭さも気にかかります。でもその一方で、この文章には、人を惹きつけて離さない、強烈なインパクトがあるのです。小気味よいスピード感、たたみかけるような独特のリズム。この一冊を是非とも読んでみてほしい、という素朴な熱意が、実にストレートに伝わってきます。

この作品に賞をあげられなかったのは、個人的には、つくづく惜しいことでした。今、この「書評」を読み返してみても、やっぱりそう思います。河野くん、これにめげず、是非またチャレンジしてみてください！他にもきっと面白い本がありますよ。あなたみたいな学生さんが図書館に足しげく出入りするようになることは、それだけでも、とても素敵なことだと思うのです。

●河野君の『書評』(紹介)

経営2年 河野智史:

佐藤純郎著『Joe』(分類番号788.3/S8/1) (扶桑社)

「辰吉丈一郎」という人間が元ボクシングの世界チャンピオンだということならかなりの人なら知っているだろう。しかし、その詳しい記録については知らない人のほうが多いだろう。この本は彼のデビューから薬師寺戦までについて、ある記者が書いている。いま、だらだらと大学生活を送っている人にお勧めだ。とくに男に。「辰吉丈一郎」、彼がなぜ有名なのか？それには、いろいろな理由がある1番の理由は、あの、「辰吉対薬師寺戦」だと思うが、本当の理由は、ほかにある。彼は、プロデビュー4戦目で日本タイトル、8戦目にして世界チャンピオンになったのだ。最近の世界チャンピオンをみても20戦はしている、それを考えると、どのくらいすごいことかわかるはずだ。自分もボクシングをやっている、だからよけいにそのすごさがわかる。しかも、そのとき彼は、21歳だった。自分は、今年で20歳になる、来年世界タイトルやれといわれたら？どうする？あ

なたは？ただリングに上がればいいというものではない。勝つために、地獄のようなトレーニングを積まなければならない。自分たち大学生と変わらない年で。そういう人がいることを皆、意識することがないと思う。確かに、こんなすごい人と比べてもしょうがないとは思いますが同じ人間である。たぶん、この本を読めば、何かを感じるはずだ。特に男なら。何も感じないなら、男じゃないと思う。この本には、辰吉の練習状況も結構のっている。彼は、1度入院してから、体重が70キロを超えたため、20キロ近くの減量が必要になった。ここまで書いても大変さはつたわらと思うが、彼は、練習のなかで、800mダッシュをやっている、自分もボクシングをやっている身として、本当にすごいことだと思う。自分はこの本を読んで、今まで以上にがんばろうと思った。今、何もやることのない人や、あってもやる気の出ない人がいると思うが、この本を読めば、何か見つかるかもしれないし、やる気が出るかもしれない。人間が「やる気」というものを保つには、なんらかの「刺激」が必要だと思う。この本は、その「刺激」になると思う。

第3回松山大学図書館書評賞募集中

応募締切	2003年9月26日(金) 午後5時
応募資格	本学学生(松山大学および松山短期大学学生)
応募要領	① 800字以上1200字以内 ② 応募件数は2篇以上も可(但し、受賞は一人1篇) ③ 書評対象図書は本学図書館所蔵のものに限る
表彰	① 最優秀書評賞・・・1篇 表彰状および副賞(図書券1万円) ② 優秀書評賞・・・2篇 表彰状および副賞(図書券5千円) ③ 佳作・・・5篇 表彰状および副賞(図書券3千円)

(詳細は4月初旬に館内掲示板および2号館前掲示板でお知らせしています。) なお、松山大学図書館ホームページに応募要項、作品等が掲載されています。(http://www.matsuyama-u.ac.jp/lib/syohyo/syohyo01.htm)

『発見、私の図書館利用法』

経済学部経済学科3年 本郷 学

「どんな風に松山大学図書館を利用しているのか、学生の視点で原稿を書いて」と言われて、改めて考え込んでしまいました。で、周りの友人にアンケートと称してどんなときに図書館をよく使うのかを聞いて、それを参考にしてみようと思いました。

友人たちに聞いてみて改めて再確認したことは、図書館を利用しない人はしないけど、使う人は良く使うということ。わたし自身、急に休講になってしまった時や、一人で時間が余った時には考えなくとも足が図書館に向かうほど頻繁に利用します。大学内で一番落ち着く場所はどこかと尋ねられたら、私は迷わず図書館と答えます。

他にも自宅では勉強に集中できないから、わざわざ図書館まで来て勉強する友達もいます。ただ一階は五月蝋い(うるさい)ので2階以上にいますが(笑)。

さすが73万冊を超える蔵書はダテではありません松大図書館。古い閉架本がすぐに借りれるのもなにげにすごいです。友達でゼミのテーマの関係で冷戦とか当時の資料が必要で1950年の本を借り出した学生もいますし、「エヴァンゲリオンの秘密」といったアニメでマニアックな本を見つけた時は、ここまで本を揃えているのだなぁと素直に感服しました。客観的に見ても、松山大学の中でも図書館の評価は高いと思います。本の多さはもちろん、綺麗な施設、ベストセラーコーナーやお薦めコーナーを設置するといっ

たところが良いですね。ただマンネリ化している兆しもチラホラ……。月一ペースくらいで新コーナーを作ってみては？なんて、頻繁に利用するヘビーユーザーの私は思ってみたりします。

それに図書館の窓際って景色がいいし、待ち合わせの場所にも便利です。待つ間は本を読むなりして待っていればいいのですから。それに、図書館は人が集まる場所ですからたまに思わぬ友達に会うことも(ニヤ)。

後少しだけ図書館に注文をつけるとすれば、雑誌コーナーに沢山の種類の雑誌がある割になにげに利用者が少ないのは気のせいでしょうか。特に洋書コーナーが(苦笑)。パソコン雑誌にしても、ちょっと初心者向けという部類ではありませんし、日経PCビギナズといった初心者向けの雑誌を置いたら大変喜ばれると思います。ただ、今図書館はこれ以上本を置くスペースがないという話を聞きます。それなら、どうして古過ぎる本やボロボロの本を交換したり廃棄したりしないのか疑問に思ったりもします。

皆さん、松大図書館はとても良いですよ。そうですねえ愛大の学生がわざわざ来るくらい(笑)。入ってスグの検問機や検索システム利用にパスワードが必要で面倒だったりしますが、これからもっと使い勝手が良くなっていきますよね、松大図書館さん♪

経済学部経済学科4年 吉本 幸子

図書館はよく利用した方だと思うが、目的は睡眠をとる為だった場合の方が多い。時に冷房が効き過ぎていたり、暖房が効き過ぎていたりもしたが、静かでよく眠れる場所だった。もちろん、読書をしながら眠りを誘われた時もある。が、本を手にはしているのはポーズのようなものだった。堂々と図書館をただ寝る為に利用しています、という態度はとれなかった為だろうと言われれば、その通りだと言わざるを得ない。

三階の窓から空や下の木々を眺め、ウォークマンで気分に合わせた曲を聞きながら友人にハガキを書くのも、いい。図書館にはハガキを書くのに必要な空気というものがあると思う。例えばそれは、すごい勢いで流れていく雲を見てあいつ元気かなあと思う時とか、遠くに行ってしまった友が好きだった著者の本を見た時や、日差しが机の上に流れているのを見た時に、過去の中に似たようなものがあつたと感じて懐かしく思う、そう思わせる何かがある空気。それに触れて、それを感じて、ハガキを書こうかなという気分になる。私は筆マメな方ではない。年賀状は書かないし、

離れてしまった友人達とこまめに連絡を取り合って会ったりしない方だ。だから、こうした機会にハガキを書くことでようやく遠い友人と繋がりが保てている。そういった面からいうと、図書館は貴重な役割を果していると言えなくもない。

図書館で本を読むのは、妥当な行為だと思う。と言うよりか、当然の。私だって図書館で読書をしなかった訳ではないのだ。自分では買わないような、ナントカ全集の気になった所だけ読んだり、4階にある絵本や小学生の頃に読んだ本を読んだり、誰か読むんだこんな本と思うような本をめくったり、自分が買って来た本を読んだりした。

図書館利用の最低限のルールは静かにしていること。これだけを頭に入れていれば、寝ようと手紙を書こうとノートを写そうと、爪を切ったって構わない。もちろん、切った爪はゴミ箱に。図書館はあれだけオープンな場所だというのに、本を読むという行為が個人的なものであるだけに、静かにさえしていれば誰も何も干渉しない。個人的な、自分一人で暇を潰すには、便利な場所である。

私が薦めるこの一冊

経営学部助教授 安積みづの



私は悪漢小説が好きである。悪漢小説というのは、善人でも悪人でもないアウトサイダーの主人公が、自分をはじき出した社会を批判的に捉え、その中で自分の智慧だけを頼りに、したたかに生きていくという物語である。絶対王権の確立した16世紀のスペインに生まれたこのジャンルは、フランスでは台頭する市民階級の間で流行し、傑作を生むことになる。そこでは、自由な視点を持った、王の側にも下級階級の側にも与しない、風刺精神に溢れた主人公たちが活躍した。さて、20世紀の悪漢小説の傑作とも言える、『夜の果ての旅』の主人公フェルディナンが会うのは、悪夢のような現実ばかりである。彼は、第一次大戦の前線で戦争神経症を患い、恐怖で妄想にうなされる。収容された精神病院では、むりやり自白を迫られ、その先には、

夜の果ての旅 上・下

ルイ＝フェルディナン・セリーヌ著
生田耕作、大槻哲男 [訳]

分類番号：908/S14/42

配架場所：開架（3階）

前線に送り返されるか、処刑柱に張り付けられるか、病院の電気ショック治療を受けるかという選択しか残っていない。おぞましいのは戦争ばかりではない。アフリカの植民地での白人の卑劣な搾取、そこから脱出してガレー船に繋がれ辿り着いた、1920年代の繁栄のアメリカでの自動車工場の非人間的な労働、パリの場末の陰惨な人間模様などなど。これらは、筆名セリーヌ、実在のデトゥーシュの実体験に基きながらフィクションを加えて書かれたものである。セリーヌはすべてを話すという使命を負って書き続ける。私たち読者は彼と同様に、人間の悲惨に圧倒されながら、どうしてこんなに暗いの?!!この地獄図は何のメッセージなの?!!と問わずにはいられない。ここではひとまず、セリーヌ自身の答えを引用しておこう。これは人間を愛するが故の「愛の物語」なのである。「この地獄でまだ性懲りもなく愛を語ったんだ、まるで屠殺場で詩を書いたようなもんさ。」

経営学部助教授 南 学



本書の著者は、世界的なファッション誌『ELLE』の編集長であった。しかし、ある日仕事を終え、帰る途中で脳出血で倒れ、二十日後意識が戻ると全身が麻痺の状態になっていた。動くどころか、自力で呼吸もできない。LISという難病である。ただし、意識や知力は以前のまま。

左のまぶただけが自由がきくことがわかった彼は、アルファベットを順に読み上げてもらい、ちょうどいい文字のときに瞬きをするという気の遠くなる方法で、この本を執筆した。この本の文章には、この有名編集長の絶望と悲しみ、愛する家族と友人たち、華やかだった過去への想いなどが込められている。

表題の「潜水服」とは彼の全身の状態を表し、「蝶」とは自らの意識を指している。意識は以前のまま自由でありながらも体の不自由は行き着くところまでたどり着く。そうした自分の状

潜水服は蝶の夢を見る

ジャン＝ドミニック・ボービー著 講談社

分類番号：956/B2/1

配架場所：開架（3階）

況・内面を、彼は、絶望の淵にいるとは思えないほどに、とてもペンがもてないとは思えないほどに、鮮やかな詩的映像的表現を用いて描いていく。

健常である我々が、このような状態にある相手を理解することは極めて困難である。しかし、それはたんに体験したことがないからというものではないことに気づくべきである。体験しないとたにも理解できないというのはあまりにも無力すぎる。それよりもこちらの側の想像力・理解力の不足を痛感すべきである。もちろんこれは相手が特殊な障害をもっている場合に限らない。まわりの誰に対しても深く理解しようというのであれば、こちらが相手に歩調を合わせ、相手全体を受け止めるだけの想像力をもたなければならない。

せめて筆者が自らの内面を見事に描いているこの本を読んで、彼の現状を想像してみるところからはじめてみてはいかがだろうか。

——統計データで見る松山大学図書館——

図書館利用状況推移表

※貸出冊数は研究室分を除く

	入館者数	貸出冊数	閲覧冊数		
			開架	閉架	小計
1998年度	222,733	44,273	85,839	13,416	99,255
1999年度	217,672	47,807	82,681	11,458	94,139
2000年度	220,574	49,377	73,299	12,132	85,484
2001年度	222,166	55,394	82,063	12,035	94,098
2002年度	230,233	58,482	74,087	12,488	86,575

『相互協力』利用件数推移表

	本学からの申込み件数			他館からの受付け件数			合計
	文献複写	相互貸借	所蔵調査	文献複写	相互貸借	所蔵調査	
1998年度	587 (52)	321 (69)	50	124 (15)	12 (0)	20	1,114
1999年度	338 (43)	175 (23)	25	242 (15)	2 (0)	10	792
2000年度	363 (41)	140 (15)	2	451 (35)	39 (8)	9	1,004
2001年度	268 (23)	177 (13)	3	499 (51)	52 (9)	12	1,011
2002年度	493 (92)	230 (40)	4	829 (90)	52 (12)	27	1,635

※〔〕内は謝絶の件数
1999年9月よりNACSIS-ILLを開始した。

「編集後記」

今号も『第2回図書館書評賞』の特集号となっています。2001年度に『図書館書評賞』を設置し、大きな反響を呼びました。それに引き続いての第2回（2002年度）の応募数は、56篇と第1回の31篇に比べると80%も増加しました。学部（学科）別の応募状況を見ると第1回は、人文社会28篇（90%）、経営3篇（10%）に対し、第2回は、人文社会42篇（75%）、経営11篇（20%）、その他は経済、人文英語、法学部が各1篇と多少の広がりを見せているが、人文社会、経営学部以外はもう少し奮起が望まれるところである。

今回は、応募数も多いこともあり、審査員の方は大変苦勞されたことと思うが、第1回応募作品より内容的にもかなり向上しているとのことご批評である。特に今回入賞までにはいたらなかったが、『Joe』のように注目を引く

作品が、何篇かあったことは今後に期待が持てるといえるのではないかと。

2002年度の図書館活動としては、全体の貸出冊数は伸びているものの、学部学生別に2001年度と比較して、経済11,175冊（108.8%）、経営11,200冊（102%）、人英4,713冊（95.6%）、人社7,631冊（81.3%）、法6,647冊（103.6%）と人文学部だけが減少し、特に社会学科の貸出冊数が20%近くも頭打ちという状況が出てきているが、今まで順調に冊数が伸びてきていただけに少々残念である。

今後は、積極的な図書館利用指導或いは図書館見学等の推進を先生方との連携により図って行く事で、図書館利用を活性化していく必要性がますます高まるもの思っている。

松山大学図書館報 No.31 2003年5月1日発行

編集・発行 松山大学図書館

〒790-8578 松山市文京町4番地2 TEL(089)925-7111(代)

ホームページアドレス <http://www.matsuyama-u.ac.jp>

E-mail: mu-libs@gc.matsuyama-u.ac.jp